幻の島へ

～蓬莱の島と補陀落の島～

青海波

「・・・して、貴方様は？」
智定房（ちじょうぼう）は居住まいを正して問いかけた。
「私は秦（*一）の方士（ほうし）、徐福（じょふく）です。」
智定房は耳を疑った。
「異国の人、それも昔、伝説の人ではないのか。」

時間と空間を越え、遙かな海上で二艘の船が行き合う「不可思議な出会い」があった。

智定房は自らを問われ、自身を語った。
「鎌倉の御家人下河辺行秀、出家し智定房と申します。
思いを定め、熊野那智浦よりの補陀落渡海（*二ふだらくとかい）、捨身（しゃしん）の行（ぎょう）にて補陀落の島へ向う者です。」
徐福は驚いた・・・が、それで理解した。

「なんと、あの奇怪な船が浄土に渡るという渡海船か。」
小船には帆柱が立ち、鳥居のある屋形が設（しつら）えてある。
その出入り口は釘打ちで塞がれ、櫓もなく、舵もない船だ。
戸を破ると、中には半死半生の男が横たわっていた。
渡海船は、まさに「海上の棺（ひつぎ）」であった。

助け出され、養生する智定房に、徐福が語りかけた。
「私と共に蓬莱の島に参りませんか。
そこには不老不死の仙薬があり、永久の生命を得ることが出来ます。」
智定房は頭を上げ、徐福に向き合った。
「人が老いゆく衰えも、尊い生の姿、
死は、生きることの一部、その帰着にすぎません。」
静かに応えた。

蓬莱の島へ、不死を求めて生きる者。
補陀落の島へ、死を求めて生きる者。

二人は、「生きる」ことをめぐり、対話の時を重ねた。
想いが交わることはなかったが、互いを知り、理解することができた。

智定房は、再び、渡海船に入った。
除服は、心を尽くした。
補陀落渡海の作法通りに、一月分の水、食料、灯明の油を運び込み、新たな戸を釘打ちした。
※3艫綱を解くと、船は潮にのり、帆は風をはらみ、旅立った。

離れていく渡海船・・・

徐福は見送りながら、智定房の別れの挨拶を思い出していた。

『天(あま)[四]が下の全ての事には季節があり、全ての業(わざ)には時があります。生まれるに時があり、死ぬに時があります。』

「私は、その時の間をこそ、生きると知ります。

渡海船は、老いを生きる私の宇宙。」

「それを見定め、私の時を生きるため、補陀落の島へ向います。」

徐福の口から、つぶやきが漏れた。

「美事な・・・」

言葉は静かな風となった。

昔今(むかしいま)、「不可思議な世界」の出来事だった。

〈注釈〉

一　秦の方士、徐福　○方士は神仙の術を行う者。徐福は不老不死の仙薬を求め蓬莱の島を探しに出た

二　補陀落渡海と捨身の行　○観音菩薩が住む浄土・補陀落の島をめざし、身を犠牲にして海を渡る行

三　艫綱　○船の先を「舳先（へ）」、船尾を「艫（とも）」と呼ぶ。船尾でつないだ綱

四　『天が下の・・・』　○旧約聖書・伝道の書（コレヘトの言葉）より一部抜粋

青海波さんの過去の応募作品『年老いた鰐』は
以下の二次元コードから読むことができます。

幻の島へ　～蓬莱の島と補陀落の島～

2026年10月24日　発行

著者　青海波

令和8年度 函南町立図書館8月～11月ＹＡ展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢107番地の1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

時間と空間を越え、遙かな海上で二人の男が行き交う「不可思議な出会い」があった。不老不死を求め蓬莱（ほうらい）の島を目指す徐福（じょふく）。浄土を求め補陀落（ふだらく）の島を目指す智定房（ちじょうぼう）。二人が生と死を語り合う。生死をめぐる先人達の思索と探求の物語。

